



瀬麻太郎



前原雄大



小島武夫

ここから打ち出された 二五 を、まだテンパイを入られなかった灘がチーテンに取る。次巡、灘に回って来たのは、板川から喰い取った形となった 二五 。対局後、灘は一番悔いていたが、これを止められず放銃。トップめから2万点を切るラス目へと転落してしまったのである。一匹目のモンスター退治である。しかしモンスター達は二の矢・



ここに 二五 を重ねて、打 二五 。テンパイまで切るまいと決めているであろうドラの 二五 だが、この時点でトップめ灘の手牌は、



をしていく。5巡目、



字牌は全て生牌。板川は今対局一番の長考に入った。悩みに悩んだ板川のチョイスは打 六 だった。万が一ソーズで打った



そして前原の捨て牌は、



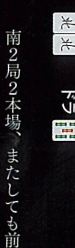
さあ、困ったのは板川だ。彼の手牌は、



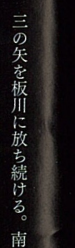
ここに 二五 を引き入れ打とし、次巡 二五 をツモ切り。タンキのままりーチを掛けた。



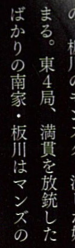
原の手牌は、



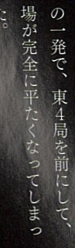
南2局2本場、またしても前原の手牌は、



三の矢を板川に放ち続ける。南1局、6巡目前原がリーチ。



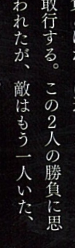
しかし、ここから真の意味での、板川のモンスター潰しが始まる。東4局、満貫を放銃したばかりの南家・板川はマンズのホンイツに的を絞る、手牌進行



この手牌に 二五 を引き入れ、前原が選択したのは 二五 切りリーチ。そして板川が一発で



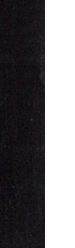
を掴まされてしまふのである。楽に逃がしてしまふれない、それがモンスター達の戦い。この一発で、東4局を前にして、場が完全に平たくなってしまう。



この手牌に 二五 を引き入れ、前原が選択したのは 二五 切りリーチ。そして板川が一発で



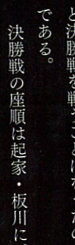
ここに 二五 を引き入ると、「リーチ」。場に 二五 は3枚、ドラの 二五 をツモれば、それこそ決定打。これに対して小島は



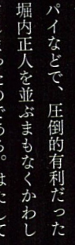
三色含みの手牌はツモ



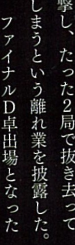
決勝戦の座順は起家・板川に、灘・小島・前原の順。東1局、先手を打ったのは西家の小島だった。10巡目、



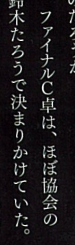
無言のまま、その手牌を眺める前原。板川にとっては連覇に向かい、この上ないスタートとなった。東3局1本場、



このリーチに対し小島の捨て牌の筋ではあるが、一発で持つて来た 二五 を前原は2巡、手のうちに置いた。そしてソーズのメンホンに手が一步進み、 二五 を捨てると、今テンパったばかりの親の板川から「ロン、7700」の声がかかった。



この手牌に 二五 を引き入れ、前原が選択したのは 二五 切りリーチ。そして板川が一発で



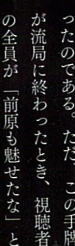
ここに 二五 を引き入ると、「リーチ」。場に 二五 は3枚、ドラの 二五 をツモれば、それこそ決定打。これに対して小島は



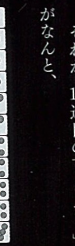
三色含みの手牌はツモ



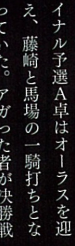
決勝戦の座順は起家・板川に、灘・小島・前原の順。東1局、先手を打ったのは西家の小島だった。10巡目、



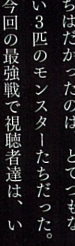
無言のまま、その手牌を眺める前原。板川にとっては連覇に向かい、この上ないスタートとなった。東3局1本場、



このリーチに対し小島の捨て牌の筋ではあるが、一発で持つて来た 二五 を前原は2巡、手のうちに置いた。そしてソーズのメンホンに手が一步進み、 二五 を捨てると、今テンパったばかりの親の板川から「ロン、7700」の声がかかった。



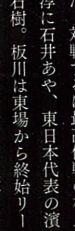
この手牌に 二五 を引き入れ、前原が選択したのは 二五 切りリーチ。そして板川が一発で



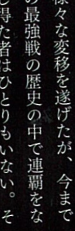
ここに 二五 を引き入ると、「リーチ」。場に 二五 は3枚、ドラの 二五 をツモれば、それこそ決定打。これに対して小島は



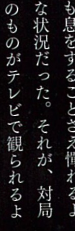
「何か面白いタイトル戦を考えよう」



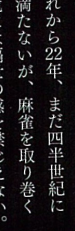
酒の席だったような気がする。竹書房の宇佐美局次長から、私たちはこう語りかけられた。「分かった、何とかしてみるよ」と引き受け、何人かの人間と供に、色々と試行錯誤の末、新しいタイトル戦として誕生したのが、この麻雀最強戦である。あれから22年、まだ四半世紀にも満たないが、麻雀を取り巻く環境には隔世の感を禁じえない。当時の麻雀大会と言え、その決勝卓の周りをぐるりと幾重にも観客が取り囲み、移動することも思えることさえ憚れるような状況だった。それが、対局そのものがテレビで観られるようになり、今やパソコンを通して、リアルタイムで観戦が出来るようになっていくのである。



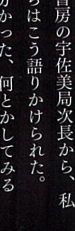
最強戦自体もシステムなど、様々な変更を遂げたが、今までの最強戦の歴史の中で連覇をなし得た者はひとりもない。そして今回の挑戦者はプロ連盟の板川和俊現最強位。その板川はファイナル予選のB卓に登場した。対戦するは最高位戦の村上淳に石井あや、東日本代表の濱石樹。板川は東場から終始リードを保ったものの、村上淳の6000オールで一気に捲られた



もし、私がこんな逆転シナリオを書いたら、またまた読者に「あり得ない」と、苦笑されるのだから。



ファイナルC卓は、ほぼ協会の鈴木たろうで決まりかけていた。ところがミスター麻雀こと小島武夫はオラスの最後の親で、メンピンツモ裏々で肉薄すると、1本場にホンイツを鈴木から直撃し、たった2局で抜き去ってしまったという離れ業を披露した。ファイナルD卓出場となった



灘麻太郎は、最悪の親満放銃スタートだった。が、福光からハネ満を奪い取る、南場に入り何とも珍しい4局連続一人テンパイなどで、圧倒的有利だった堀内正人を並ぶまもなくかわしてしまつたのである。はたして板川は、これら前原・小島・灘という、ここ数十年に渡り麻雀界を牽引してきたモンスター達と決勝戦を戦うことになったのである。

